【ねがいましては】

平成２２年５月２４日　　*KYOWA SCHOOL*
第２３５号

「勉強は悪者じゃない」

最近「なるほど」と、うなずくことがありました。

『勉強が悪いんじゃない、勉強を成績という比べるものに使っている大人たちが悪いんだよ』です。

我ながら「そうだよね」と、感心してしまいました。

理想的な勉強像とは、脇目も触れず一心に取り組んでいる様子。わかっていくことがたまらなくうれしくてならない。次々に飛び出してくる疑問、すぐさま「なぜだろう」という気持に駆られて調べたくなる、聞きたくなる。

教育の現場ではどのような風景なのだろう。私には寂しさと同時に、恐怖心が走ります。

やる気を失った子どもたちばかりの教室で、惰性を掲げた先生方が一部分の子どもたちを相手に授業する。先生と生徒たちの間に生き生きとした心の交流は考えづらい風景です。そしてその風景が積もり積もった時、この日本はどのような国になっているのか・・・。

思い切って成績を廃止し、理想の学びに近づけてみたらと思うのですが、これも「わかっているのだけれど」という専門家の答えが返ってくるような気がいたします。（ここではやっています。）

なぜか、ここまで勉強と成績が密接に繋がってしまいますと、常に子どもたちは勉強を『競う道具』として捉えていきます。当たり前と言えば当たり前なのかもしれませんが、ご父母の皆さんも、その当時は勉強→成績という図式で成長なさったからです。もちろん私もその一人ですし、しっかり勉強は嫌いでした。

ですから当然、勉強やったかやらなかったかは、テストの成績で判断します。これがあたり前なのです。

子どもたちにとっては、ちっとも当たり前ではないのです。小学校１年生になったばかりの子どもたちの表情をご覧になってください。オープンスクールなどでご覧になれます。

どうしようどうしようと、オロオロしている子も見かけられますが、過半数は幼い無邪気さを前面に出します。

学ぶことに『夢』を重ねている状態とでも言えるのでしょうか。「先生、なに教えてくれるのかな。」「クラスのみんなと一緒にどんなことやるのかな。」

１年生になって早々、「悪い点とったらどうしよう。」だとか「ぜったいに１００点ばかりとるぞ。」などと考えている子はいないでしょう。入学以前から脅迫めいたことを言われている子は除きます。

そして徐々に洗脳されて行く・・・。皆同時に同内容のものをテストされ、返却される。そしてとなりの子との比較、そしてあってはならない言葉の連発、「えー、おまえそんなのできないの。」「おれしってたよ。」「〇〇ちゃん、けっこうバカなんだね。」・・・・・

これがどの程度、人のこころを傷つけているかなど、１年生諸君たちには想像できるはずがありません。まだ、そこまでこころは育っていない子が多いのです。しかし中には繊細な感情を持ち合わせた子もいます。発達的見地から見た場合、どちらが成長しているのでしょうか。当然後者です。そしてその子たちは傷つき、勉強が嫌いになっていきます。

つまり心の成長がしっかりと行われている子ほど、勉強に恐怖を感じる度合いは高くなります。逆にいえば、鈍感な子ほどへっちゃらなのです。これを当てはめますと、成績の良い子は鈍感な子。

１００点は良くて、０点は悪い、このルールも大人たちが平然と使用しています。「今度悪い点とったら、〇〇買ってあげないからね。」

徐々に浸透していきます。『勉強は評価なんだ・・・。』

そして発生する勉強嫌い。勉強嫌い方程式完成です。

ではなぜ勉強と成績を分離できないのか。答えは簡単、リバウンド現象です。

人は誰だって楽をしたがります。どんな場合にも『楽』がいい。

いきなり学校で「きょうからテストはなくなります。」と言われたら、子どもたちのほとんどが「やったー、勉強しなくていいんだ。」と、思います。それだけ知らない間に勉強→テストはあたり前なものとして彼らに宿っているのです。

リバウンド現象が怖いのか、それとも子どもたちが信じられないのか、いずれにしても今の教育現場から『成績』（数字による評価）は無くなりそうにありません。

この小さな学び家ではテストはありません。評価もありません。点数をつけません。あとはいかに子どもたちが学校とここを分離して考えてくれるかです。なかなか簡単にはいきません。なぜならここで行うことも学校の内容に則していることが多いからです。

あきらめません。私がここであきらめてしまったら、子どもたちに本当の学びを伝えられないかもしれません。ですから何回も書きます。前回もそうでしたが、間違える練習です。失敗する練習です。そして生き生きとした表情で何事にも向かおうね、助け合おうね、勉強でね！